

[ラルフ・W・ハリス]「聖霊」

Ⅱ. 旧約時代における聖霊

詩篇 139：1～12

私たちの住んでいる時代は聖霊が在し、活動している特別な時代である。しかし、私たちが記憶しなければならないのは、この聖霊は昔も同じように働いていたということである。大昔、時の始めに聖霊は三位一体の神の第三位として存在していた。聖霊は創造のみわざのうちに働いていた。聖霊は旧約聖書時代の人々の間に活動していた。事実、聖霊は過去におけるすべての偉大な業績の背後にある秘訣であった。



創造における聖霊

昔、人間が地上に現われる以前、さらに地球が存在する以前、聖霊は存在していた。

創世記 1：2 のはじめの部分は暗い場面を示している。形のない塊り、むなしさ、暗闇、しかし、神が光あれと言われる前でさえ、そこには一筋の希望の光が輝き出していた。「神の霊が水のおもてをおおっていた。」それこそ大切なことである。

三位一体の神における各位は創造のみわざのそれぞれの働きを持った。

父なる神はすべてのことを計画された。その計画を実行したのは御子の力強い右の手であった。そして父なる神、子なる神と共に、聖霊は創造のみわざに関与されたのである。

聖霊の特別な働きは生命を与えることである。

それは創造においてそうであり、イエスが死人のうちより、よみがえらされた時にそうであり、人間の新生においてそうである。何という偉大な、すばらしい真理であろうか。個々人に、また教会に霊的生命をもたらすことの出来るのは聖霊なのである。

聖霊はまた自然界における大きな働きを持っていた。

ヨブ 26：13 は「その息をもって天を晴れわたらせ」と言っている。「晴れわたらせ」という語は飾るという意味である。天は何をもって飾られたのであろうか。夜空はさまざまな天体からの光によって輝いている。天文学者たちはそれらの星は変化する色を持っていると語っている。まことにそれらは夜を飾っているのである。また日の出、日の入りの

美しさに驚かない人がいるであろうか。クリスチャンはそのような光景を描いている芸術家なる神を知っているのです、これらの不思議について特に感謝することが出来るのである。

詩人が、「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた」と言っているのを聞いていただきたい（詩篇 33 : 6）。「息」という語はまた「霊」と訳すことが出来る。聖霊がこれらの不思議を存在させるお方であることがわかったと思う。

洪水以前における聖霊

創世記 6 章の最初の節は暗い光景を描いている。地は墮落し、暴虐に満ちていたのである。人の悪ははなはだしく、それは地をおおい、すべて人の思うところは全く悪いことであつた。神が心を痛めたのは不思議ではなかつた。神が人を地のおもてからぬぐいさり、ノアとその家族によって、新しい始まりを造ろうと決心されたことは、不思議ではなかつた。しかし怒りの中にあつて神は隣みを思い起こされた。神はノアに憐みを示され、やがて来たるべき審判から逃れる方法を備えられた。ノアは神と共に歩んだ正しい人であつたので、それは期待されたことであつたかも知れない（創世記 6 : 9）。神は正しい人に対して必ず憐れみを施される。

しかし、神は悪人に対しても憐れみを示された。神は聖霊を送り、人類が聞き、悔い改めるために 120 年を与えられたのである（創世記 6 : 3）。

ここに私たちは、罪人の心に迫る聖霊の大いなる働きの一つを見る。罪人は聖霊の喚起に対して逆らう傾向がある。迫りつつある審判についての聖霊の警告は罪人にとって快いものではない。しかし、それを聞き入れ、悔い改める者は神の御霊の忠実さに感謝するのである。

創世記 6 : 3 の宣言は悲しいことである。「わたしの霊はながく人の中にとどまらな

い。」 神の忍耐は人間の理解をはるかに越えるものではあるが、そこには限界がある。ごく少数の人々は、もはや聖霊の静かな働きかけには応じなくなる状態に達する、と多くの学者たちが信じているが、厳粛な事実は確かにそうなる人たちがいるということである。

罪人が救いの機会をむだにすることは実に恐ろしいことである。

旧約聖書の指導者たちにおける聖霊

ここでは、旧約時代の人々を扱われた聖霊についての興味ある話題にはいっていきこう。私たちが住んでいる時代の前でさえ、聖霊はこの世において活動的であり、信者たちはバプテスマの経験により聖霊に満たされたかも知れない。三位一体の神の第三位なるお方は非常な力をもって人々に臨んだのである。

強大なエジプト民族が、かつてなかった危機に直面した時のことである一人のヘブルの青年が王の夢を解きあかし、七年の豊作ののちに七年の凶作がやって来ることをパロに告げた。そのききんは豊作の年を忘れさせるほどに激しいものであった。夢を解きあかしたヨセフは王に、監督を置いて豊作の間に食糧をたくわえさせるように進言した。

パロはこの大切な仕事をさせるために、だれを見いだすことが出来たであろうか。王の質問は、「われわれは神の霊をもつこのような人を、ほかに見いだし得ようか」というものであった（創世記 41：38）。そこで王の目はヨセフの上に向けられた。神の霊がこの青年に夢の解きあかしを示したのだから、神はまた非常の時のために知恵を与えることが出来たのである。そこで、神の霊に満たされた監督がエジプトの経済をつかさどり、思慮をもって国事にたずさわって多くの生命を救ったのである。

今日、指導的立場にある人々も同じ助け、すなわち神の霊が与える知恵に頼ることが出来るのである。しかし知恵はまた、すべての実際的な問題にも必要とされる。モーセが建築家、職長、大工のこれらすべてを備えた人物を必要とした時、神はベザレルを備えたのであった（出エジプト 31：1-6、35：30-35）。

私たちはしばしば、聖霊の働きをただ「霊的働き」と呼ぶものにとどめてしまっている。しかし、教会の中における事柄でさえ、現世にかかわる問題が多いのである。私たちは実際的な仕事の上にも御霊の油注ぎを受けるために、ベザレルの神を期待することは出来ないだろうか。

サムソンは人間の生涯における神の霊の力のいちじるしい例である。ある人々はサムソンは大男で、彼の業績は人間的武勇によるものであったと考えている。しかし聖書は、力の秘訣は主の霊であったことを注意深く指摘している。彼が、素手でししを裂くことが出来たのは主の霊が彼にのぞんだからであった（士師記 14：6）。彼がろばのあご骨をもって一千人を打ち殺すことが出来たのは、主の霊が彼にのぞんだからであった（士師記 15：15）。

イスラエルの初期の王であったサウル、ダビデの時代において、聖霊はたいへん活動的であった。サウルを新しい人に変えたのは聖霊の働きであった（サムエル上 10：6）。聖霊はまた敵に対して彼の民を導くために若い王に油を注がれた（サムエル上 11：6）。更のちにおいてサムエルは、未来の王となるべき青年ダビデに油を注ぎ、この時から聖霊は彼の上へのぞんだ（サムエル上 16：13）。ダビデがゴリアテを破り、のちによき政治を施し、すばらしい詩をつづらせたのはこの聖霊の油注ぎであった。

旧約時代の聖霊の働きは、預言者たちの生活と彼らの働きの中でそのクライマックスに達した。聖霊は彼らの生活の中に三つのかたちで働いたのである。

- (1) 彼らは聖霊の力によって多くの業績を残した。エリシャは聖霊こそエリヤの生活の原動力であることを認めて、彼は最後の求めとしてエリヤの霊の二つの分、すなわちエリヤに対する聖霊の油注ぎが、彼の上にも与えられるようにと願った。
- (2) 預言者たちは聖霊の油注ぎを受けて、人々に神のメッセージを語った。
- (3) 彼らが後代の人々に残したところの書かれた言葉は、聖霊の感動によって生まれたものであった。ペテロは彼らは聖霊に感じて語ったと言っている（第二ペテロ 1：21）。

聖霊は神であるから、過去におけると同じように今日も変わることはない。聖霊の力はすべての信者に対して与えられるものであり、また必要とされるものなのである。